

携帯メールにおけるジェンダー

文末に現れる様々な記号の使われ方に注目して

三宅 和子(東洋大学) 第14回社会言語科学会(2004年9月5日)

1. はじめに

本研究は、携帯電話を使って送受信されるメール(「携帯メール」と呼ぶ)の言語表現、言語行動において、ジェンダーがどのような特徴をもって現れているか、そしてそれは従来の書きことば、あるいは話しことばのそれとどのように異なるかを論じる。

2. 研究の背景

日本語は男女差が比較的大きい言語といわれてきた。これまで「男=人間、規範」、「女=女という性=逸脱」という構図のなか、基準としてある「男ことば」とは異なるものとしての「女ことば」に注目し、性差が研究されることが多かった。

女性語研究は、過去の使用に関しては物語、戯作、狂言などの書きことばを通して、当時の使用実態を間接的に知る形で行われた。古くは「女房ことば」や「廓ことば」のように、男性の使うことばとは異なる上、「その時代の一般的言語使用の実態」とも異なる現象が焦点になることも少なくなかった。

現代語の研究では、書きことば、話しことばともに対象とされるが、それぞれアプローチに特徴がある。書きことばと話しことばを比較すると、書きことばでは材料として新聞や小説などが使用され、その背景にあるステレオタイプや規範性を探るものが多い。それに比して、話しことばは自然談話を採録して文字化し、現実の使用の実態に迫ろうとするものが多い。調査からは、内省や一般に把握されていることとは異なる結果が現れることも少なくない。

性差は特に文末表現、呼称に顕著に現れるとされ、これまでそれを手がかりに研究されることが多かった。近年の自然談話の研究から分かっていることは、女性専用形式とされる「てよ、だわ、こと」などが使われなくなったこと、女性的といわれる言語形式(「~なの」「~わよ」など)の使用も衰退する傾向が強いことなどである。加えて、男性専用形式(「~ぜ、~ぞ」など)を男性が使用することが少なくなり、女性的といわれる形式を使用する率も増えているといわれる。これはまとめていえば、性差が少なくなり、中性化しているという現象である(小林 1993)。

この中性化は女性が男性的言語形式を積極的に使用することによって促進されている面も観察される。加えて、言語使用の性差規範にも変化がみられるようだ。

鈴木(2004)は、男女の自然会話を文字化し、一文ずつ男女どちらの発話かを若い被験者に判断させたが、その結果、男性の発話の20%弱が女性のもので判断された。その性別判断の根拠として、「~だよ」「~よ」という文末詞は女性が使う、といった根拠を上げている被験者も少なくない。これは、従来男性的言語形式として理解されていたものが、若者の間では異なって受け取られていることを示している。従来の使用規範と実際の使用実態とがずれてきているといえそうだ。

このような変化は、若者文化のなかで急速に起こっていると思われる。携帯メールの使用が、現代の若者のコミュニケーションに欠かせなくなっている現在、ジェンダー現象の変化を捉えうる貴重なデータとしても、携帯メールは注目されるべきである。

3. 書きことばと話しことばの「はざま」

携帯メールは、文字を使って行われるコミュニケーションである点で「書きことば」である。しかし、その表現や内容は、しばしば「メールで話した」とか「メール会話」などといわれるように、使用者は「話しことば」に近い感覚をもっている。つまり、携帯メールには「書きことば」と「話しことば」の両方の性格があるといえよう。

若者による携帯電話利用で、電話機能をはるかにしのいで使われているのがメール機能であり、若者のコミュニケーションは現在、携帯メール抜きには語れないほどになっている。

若者がコミュニケーションの多くを携帯メールで行うようになるにつれ、日常的で自然な話しことばの特徴をメールのなかに織り込もうと工夫する動きに拍車がかかっている。書きことばにすると落ちこぼれてしまう会話の情報、とくに非言語表現や情動表現を補完するために、絵文字・顔文字をはじめ、長音や小文字の使い方など、様々な工夫がみられる(三宅 2003)。

いっぽう、メールの書きことば性を利用し、会話では表現し難いものや表出ししないものが表現されることもある。例えば、(1)~(3)のようなものである。

(1)のように自分のいったことをモニターしている自

分を表現したり、(2)のように送信者が、受信メールから相手の様子をどう受け取ったかを絵で示したりしている。(3)では「あたしは」では表せない音声的な情報を付け足そうとしたというより、書きことば遊びをしながら、何らかのインパクトを与えているといえる。

(1)俺に惚れてもしらないぜ...(´ ｀)

(2)声が死んでたね[💩]

(3)アタシわ武蔵野

このような工夫は文末に多く現れ、携帯メール独特のコミュニケーション空間を作り出している。これら文末に現れる様々な記号の使われ方にも男女の差があり、コミュニケーション・スタイルの異なりを反映しているとみられる。

4. 文末表現としての絵記号類

すでに述べたように、性差が文末に表れやすいためにこれまでの研究はそこに集中する傾向があった。本研究では、携帯メールで文末に顕著に現れる「絵記号類」に注目し、性差を考える。

2004年5~6月に収集した大学生間で交わされたメール658件をデータとし、文末に現れる絵記号類を分類してその出現頻度や割合の違いをみた。

話しことばの単位を決めるのは常に難しいが、これまで「発話」という単位が、書きことばの「文」と対置する形で使われることが多かった。携帯メールは書きことば(「打ちことば」、「押しことば」ともいわれる)でありながら、話しことば的な要素を多分に含むため、その単位認定は、ますます難しくなる。本研究では、「文」という用語を使い、その定義を暫定的に、「句点、絵記号類などで区切られた、ひとつの意味的なまとまりをもったことばのかたまり」としておく。

この文末で現れる記号類を、以下の8種類に分類し、分析の対象とした。~が携帯メールでは特徴的に現れるが、これらをとくに絵記号類と呼び他と区別する。

絵文字(機種は問わない)

☺ ☹️ 🙄 など

顔文字

(^^) (^0^)/ (@_@) など

記号

など

カッコ文字

(笑) (泣) (爆) など
疑問符・感嘆符

? ! !! !? など

句点

「。」

空白

絵記号や句点を使わず文の切れ目として使われていると思われるもの

その他

~ 以外のもの など

ただし、1文に2つ以上現れた上記の記号類は、それが同じ場所に同種のもので続けて現れた場合は1件と数え、異なる場所に現れたり、同じ場所でも異種の場合はそれぞれを1件と数えた。

5. 絵記号類の使われ方とジェンダー

送受信者の性の違いによって、文末に現れる8種類の記号の種類や数に違いがみられるであろうか。データの送受信者を、M M(M=男性、F=女性)、M F、F M、F Fに分けて調べた。

図1は8種類の文末記号がどのように使用されているか、性別ごとに記したものである。4種類の送受信文の数は均等ではないため、パーセンテージで示してある。ここで分かることは、絵記号類+カッコ文字、疑問符・感嘆符が文末の約70パーセントを占めており、特にF Mでは80%を超えていることである。句点は書きことばの文の単位を決定すべき大切な記号だが、全体でもわずか20%強しか使用されていない。しかも、ここには大きな性差があり、男性の句点使用を見ると、M Mでは文の50%が句点で終わっていることに気づく。

これと呼応するように、絵文字・顔文字・記号の使われ方には大きな性差がある。こちらは女性の使用が多く、F F、F Mともに40%を超えるが、男性はM Mでわずか10%である。疑問符・感嘆符は男女を問わず30%前後使われている。

さて、ここで最も注目したいのは、女性・男性が同性に対して送るメールと異性に対して送るメールでは異なりをみせるという点である。

M FはM Mに比べると、絵文字・顔文字・記号の使用率が10%から20%強に増えている。また、カッコ文字の使用は2.5%から0%になっている。F FとF Mを比較すると、絵文字・顔文字・記号をはじめとする様々な記号の使用頻度にはほとんど差がなく、カッコ文字のみ使用が増加している。カッコ文字は同性間での使用頻度は同じ程度であるのに、異性間の送受信では男性デー

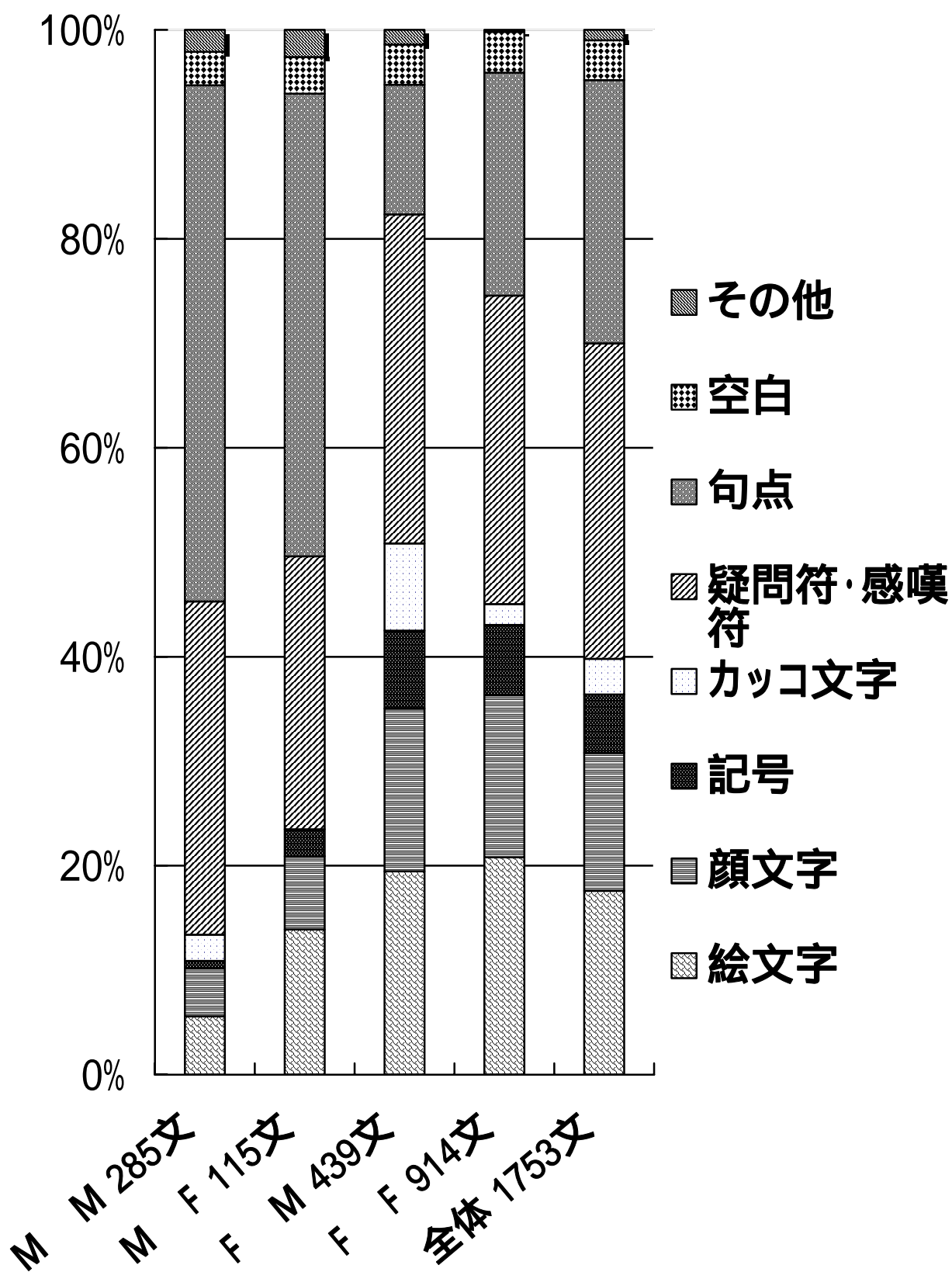


図1.携帯メール文末の記号類の割合：男女比

タからは消え、女性データでは増加する。この現象が一般化できるものなのか、理由は何なのかについては、今後の調査で考えていきたい。

以上の比較を通して顕著なのは、男性が女性に対して送るメールで、絵文字・顔文字・記号など、情緒記号とされるものを大幅に増やしているということである。これは男性が女性に対して、自らのコミュニケーション・スタイルを、女性のそれにシフトさせていると理解することができる。三宅編(2003)の報告においても、いくつかの異なる角度の研究でこのことが指摘されていた。例えば、山崎(2003)は男女の送信文字数と返信までの時間を調べたものだが、男性は女性に出すメールで、総文字数が男性どうしの場合の2.5倍にまで達するのに、返信までの時間はわずかしら増えていない。この調査では送信相手が親疎・目上目下と様々であり、今回の2004年度データ(送受信は友人間のみ)とは異なる。しかし、男性が女性に適應させて文字数や絵記号類を増やし、しかもなるべく速くメールを返す努力をしているようにみえる。

これまでの調査データでは、女性のほうが絵記号などの特殊な文末形式を数多く、バラエティーをもって使う傾向があった。また、女性はこれら絵記号の積極的な発案・使用者であるとともに、暗号やギャル文字をはじめとする特殊表記の開発を積極的に支えてきた存在でもある(三宅, 2004)。さらに、90年代以来、ポケベル、PHS、ケータイと続くパーソナル・コミュニケーション・メディアの牽引役を果たしてきたことも見逃せない三宅(2001)。その意味で、男性が女性のコミュニケーション・スタイルに擦り寄るように見えるのは、携帯メール文化のフロント・ランナーに近づく姿勢をとっているのかもしれない。

男性ほどではないが、女性にも男性に合わせる傾向がみられる。この両者からの接近は、異性間の「関係づくりへの配慮」がなされている結果と考えることもできよう。

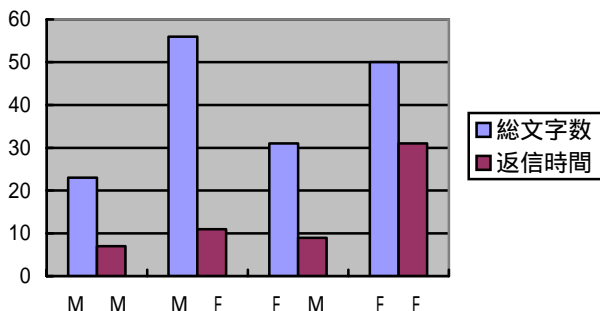


図2. メールごとの平均総文字数と返信までの時間

7. おわりに

ことばとジェンダーの関係を探るために、本研究では文面に現れる絵記号類に注目して分析した。話しことばと書

きことばの両方の性質をもった携帯メールは、ことばとジェンダーの研究に限らず、言語変化や若者の言語行動の研究に格好な材料を提供してくれる。電子メディアを通じたコミュニケーションに関する研究は、まだ取り組まれ始めて日が浅い。性差に関しても語彙、表現、表記、内容など、今後調査すべきことは多い。

謝辞

本研究は、東洋大学で担当した2003年度、2004年度日本語学演習受講生との話し合いや共同作業から得られたものが多い。ここに記して学生諸氏に感謝の意を表したい。

参考文献

- 遠藤織江・尾崎喜光(1998). 女性のことばの変遷 日本語学 Vol.17 No.6 56-79 明治書院
- 小林美恵子(1993). 世代と女性語 世界の女性語 日本の女性語 日本語学 Vol.12 No.6 181-192 明治書院
- 三宅和子(2001). ポケベルからケータイへ 日本語学 Vol.20 No.10 6-22 明治書院
- 三宅和子(2003). 対人配慮と言語表現 文学論藻 第77号 207(16)-178(47) 東洋大学
- 三宅和子(2004). 「規範からの逸脱」志向の系譜 携帯メールの表記をめぐって 文学論藻 第78号 178(1)-162(17) 東洋大学
- 三宅和子編(2003). 日本語学研究報告 東洋大学文学部三宅和子研究室
- 中村桃子(2001). ことばとジェンダー 勁草書房
- 鈴木将(2004). 現代語研究 日本語の性差 東洋大学文学部日本文学文化学科卒業論文
- 山崎龍一(2003). 文章の長短は何に関連するか 日本語学研究報告 三宅和子編 19-20 東洋大学文学部三宅和子研究室

連絡先

三宅 和子 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学文学部 miyake@toyonet.toyo.ac.jp